

五の次は六



細野 哲弘 (株) JECC代表取締役社長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

「一か八か」¹⁾、「四の五の言う」²⁾というのは、ともに丁半賭博の用語である³⁾。一と八は随分離れているから「エイ、ままよ」と思い切りよく賭けるさま。サイコロの四と五の目は真ん中の隣同士で、その丁・半のいずれを選ぶかをいつまでも迷っているさまを「四の五の言う」という。要はグズグズして決断しないことを言う。

本稿は「五と六」の話。さて、どんな決断の物語になりますか。

織田信長の係累には美形が多い。信長自身も細面のすっきりした顔立ちであり、妹のお市の方(浅井長



織田信長像(岐阜駅前)

政室、後に柴田勝家室)、お犬の方(佐治信方室、後に細川昭元室)、次女の冬姫(蒲生氏郷室)をはじめ、お市の方を母に持つ三人姉妹のお茶々(「淀君」、豊臣秀吉室)、お初(京極高次室)、お江(徳川秀忠室)が美女として有名であるが⁴⁾、

叔母(父織田信秀の妹)の「おつやの方」もその一人。

この時代、武家の女性、子供には独立の人格は認められず、所謂政略の駒として婚姻、人質に供され、幾多の奇縁、悲運の対象になってきた。

おつやの方(「お直の方」ともいう)が美濃岩村城主遠山景任に嫁したのは兄織田信秀の調略による⁵⁾。岩村の地は、信州から三河に抜ける交通の要路で、軍事的にも重要な位置にあり、武田と織田の勢力がしのぎを削る最前線であった。織田側はいち早くおつやの方を景任の正室に送り込んで遠山氏を取り込んだものの、二人の間には子供がなかったため、息子の信長も我が子の五坊丸⁶⁾を二人の養子にして同盟の絆を太くしていた。養子としての五坊丸は養父母によく馴染み、おつやの方も血の繋がりのある彼に実母のような愛情を注いだといわれている。

他方、この地の重要性は武田にとっても同様で、これを奪取せんと再三にわたって岩村城を攻撃している。しかし、岩村城は天然の要害として難攻不落の名城⁷⁾であり、容易に落ちることはなかった。また、城主景任もなかなかの戦上手でよく凌いでいた。……が、しかし武田との戦闘で槍傷を負い、療養するも遂に癒えず、陣没してしまう。

1) これらの語源については、俚言集覧(りげんしゅうらん)にある。福山藩の漢学者太田全斎が、自著の『諺苑(げんえん)』を改編増補したものとみられ、19世紀前期の成立で、26巻。石川雅望の『雅言集覧』に対して、口語、方言を主として扱い、諺も扱っている。

2) ここに記したおつやの方以外の女性たちの劇的生涯については多くの著作があり改めて紹介を要しないが、二人だけ特別に注記したい。信長の次女・冬姫は蒲生氏郷に嫁し、夫の死後その美貌に言い寄る秀吉を撥ね付けた上で落髪し仏門に入ったと云われている。「白梅の精と見紛うほどの姫」と言われた美貌だが、葉室麟の同名の小説では、むしろ別の視点から彼女の気丈さと独特の「女いくさ」に焦点を当てている。お市三姉妹の次女・お初の方は、夫の死後早くに出家(常高院)し歴史の表舞台から消えたため、比較的目立たない。ただ、大阪の陣に際し、姉の茶々や秀頼の娘の救出を画して、豊臣、徳川の間を何度も行き来し調停に奔走した。その美しさは龍安寺にある珍しい立膝肖像画に窺うことができる。

なお、美女の話題の中で言及するのには些か躊躇(ためらい)があるが、信長の弟、お市の方の兄にあたる織田秀孝という若武者がいる。15才で悲運の死を遂げたが、その美男子ぶりは、信長公記に「お膚は白粉の如く、丹花の唇、柔和の姿、容顔美麗、人に優れていつくしきとも、中々たとへにも及び難き御方様なり」と記されている。

3) この時代の女性の生まれ年は不明なことが多いが、おつやの方は甥の信長よりも幾才か若く「年下の叔母さん」であった。岩村城への興入れの時に30才台と推測され、初婚ではなかったと思われる。

4) 五坊丸は信長の四男又は五男と伝えられ、「御坊丸」と表記する書もある。

5) 美濃岩村城は、大和高取城、備中松山城と並ぶ「日本三大山城」の一つで、標高781mと日本で一番高い処にあり、六段壁に守られた峻険な城である。歴史も古く、築城された中世から近世まで683年続いた名城。「日本100名城(日本城郭協会)」の一つでもある。城主は遠山氏、秋山氏以後も変遷しているが、松平乗紀(のりただ)以降は松平氏が幕末まで7代続き、老中を二人輩出している。



岩村城址

弱肉強食の戦国の世で、城主の死は一大事である。この時、跡取り息子の五坊丸はまだ6歳の幼児でしかない。未亡人となったおつやの方は五坊丸を盛り立て「事実上の城主」として差配を始めることとなった。しかし、そうした異変は当然に武田側が知るところとなり、信玄は重臣秋山虎繁（「信友」ともいう）を主将として改めて岩村城攻略にあたらせた。虎繁はそれまでの力戦型の攻めを改め、持久戦に持ち込んで籠城の遠山方に揺さぶりをかける手に出た。織田側から差し向けられた与力は当然に徹底抗戦を主張したが、籠城が長引くにつれ兵糧も乏しくなり、頼みの信長からの援軍が到来しない中で⁶⁾、遠山の家老たちに和議の機運が持ち上がってきた。寝返りを促す密書に動揺する遠山の重臣と織田の与力との溝を見て、いよいよ「女城主」に決断の時期が迫ってきた。戦いの継続ができないなら和議しかない。それが結論であった。

だが、和議の交渉は難航した。降伏開城に際して当時は城主の命を差し出すのが常識的作法であった。武田側にしてみれば城主が幼いかどうかは関係がなく、しかも織田の男系子孫である五坊丸は当然に首をはねる対象であった。しかし、母として、女として幼い命を差し出すことを峻拒した彼女は、敢然と「事実上の城主である自分を処断すべき」と要求した。さりながら、攻防のけりを女性の仕置きでつけるというのは、武田という誉れ高い武門の流儀に到底沿

うものではなかった。膠着の中、あくまで五坊丸の助命に固執するおつやの方に業を煮やした遠山家の家老たちが編み出した妥協策は、驚天動地のものであった。それは「母子とも断罪」、「いずれか助命」、「両方助命」の選択肢の中で、「勝将の妻の連れ子の命は取らない」という理屈で双方の顔を立てんとするものであった。しかし、「城を武田側に明け渡し、秋山虎繁を城主とする。おつやの方は虎繁の側室になり、五坊丸は助命して貰う。」という妥協案を聞かされたおつやの方の胸中は察して余りある。女の身には「敵将の側室」になるというしか「城主の責任」が果たせず、その屈辱を拒否すれば幼子の命はないとすれば、彼女に選択の道は一つしかなかった。助命されたとはいえ、さすがに五坊丸が母の元に留まることは許されなかった。信玄の養子（人質）として、甲府の躑躅ヶ崎に送られることになった。これを見送る母おつやの方の胸は張り裂けんばかりであったろう。

それにつけても、この捌き……。絶妙なバランスというべきか、異例というべきか、おつやの方もさることながら、武田、秋山側も「よくも呑んだな」と思わせるものである。ところが、異例には異例が重なるもの。図らずも偶々夫婦となった虎繁とおつやの方との間にロマンスが生まれる⁷⁾。虎繁は、おつやの方の子を思う一途な心情に動かされたか、或いは彼女の美貌に魅せられたか、睦まじくなった二人の間に、男子が誕生する。「五」坊丸の弟として「六」太夫と名付けられた。が、しかしその存在は固く秘密にされた。その懐妊・誕生の時期は武田信玄の死（1573年）という武田家の一大転機の前後であり、虎繁は武田の将として、微妙な血を受け継ぐ息子の将来には深く思うところがあったと思われる。

この時期の戦国絵巻には枚挙にいとまがなく、まさに武田から織田・徳川へと時代の歯車が大きく動くときであった。信玄の遺訓（喪を伏し三年兵を動かすな）に反して勝頼が大軍を動かし、長篠の合戦で致命的な敗北を喫したのは1575年のことである。武

6) この時期、信長は長島一向衆の討伐に忙しく、援軍は送ったものの、雪のため落城を食い止めるに間に合わなかったといわれている。

7) おつやの方と虎繁は戦場でまみえる前に既に知己があったとの説がある。虎繁の秋山家は武田家四家の一つで、伊那郡代（伯耆守）として美濃、遠江、三河方面の軍事・外交を担当した。虎繁も主君武田勝頼に信長の娘を娶あわすに際して結納を岐阜に届けるなどしており、その折おつやの方とも対面の機会があったかもしれない。その頃からおつやの方の美貌に目をつけていたとの下世話な推測もあるが、興を醒ますので立ち入らない。

田軍劣勢の中で、苗木城はじめ付近の城が織田側に奪還され、虎繁が孤塁を守る岩村城には、信長の嫡男信忠が二万を超える兵力で押し寄せた。虎繁は守兵三千を駆使し、名城の利点を最大限に發揮してこれを迎え撃った。岩村城は山城なるも城内に17か所の井戸があるなど湧水



当時の恵那郡付近（岐阜県歴史資料館の「細見美濃国絵図」の原画を陶板に焼いた岐阜市歴史博物館展示より）

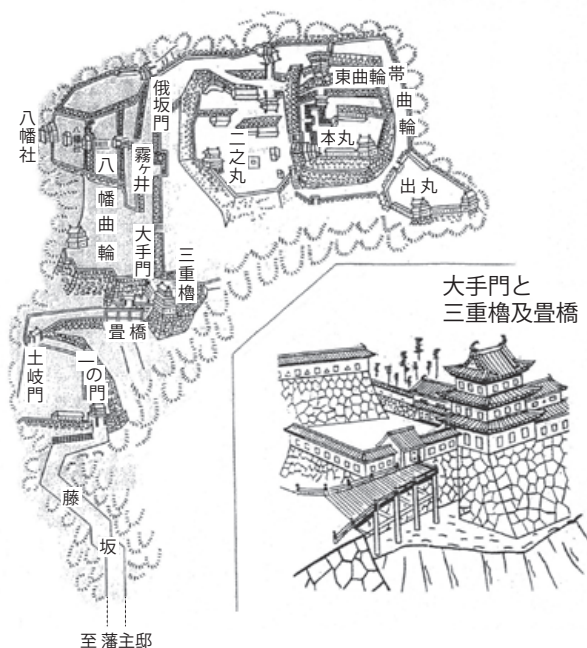
が豊富で⁸⁾、また城内から坑道を掘って飯田方面からの糧秣^{しよくりよう}の補給にも工夫がされていた。しかし、半年余りの籠城の末、坑道の間道を察知され徐々に苦境に陥り、夜襲に打って出たところを逆襲され大打



岩村城内の井戸（霧ヶ井）

撃を蒙るなどし、遂に和議に応ずるのやむなきに至った。「縁者^{みうち}の城が炎に包まれるのを観たくない。降伏すれば助命する」という信長からの口上も届けられた。しかし、それは偽りの甘言であった。またもおつやの方の運命は暗転する。

信長の革命児たる所以は前時代的な権威の破壊にあった。彼は「近代」を開かんとし、この場合の前時代とは中世である。宗教的な権威^{あぐら}に胡坐をかいた神仏は中世の亡霊であり、それへの憎悪が比叡山僧俗



岩村城絵図（岩村歴史資料館で頂いた「岩村城のあらまし（岩村町歴史シリーズその1）」より。図中の建物は現存しない。）

三千人の焼き打ち、伊勢長島の本願寺門徒二万人の焼き殺しに向かった。同時に、たとえ肉親であろうとも彼の「近世」達成に竿差す「裏切り」にも容赦はなかった⁹⁾。

おつやの方の「我が子同様の幼い城主」を救う苦渋の決断は、信長にとっては「宿敵武田」配下の男に無断で嫁し、あまつさえ実の息子を武田の人質に「売った」許しがたい裏切り行為でしかなかった。「縁者である甥」からの申し出だからとそれを信じて、城を明け渡すという決断をしたおつやの方と虎繁を待っていたのは、逆さ磔^{はりつけ}の刑であった。失意、無念の思いを胸に、二人は長良川河川敷の露と消えた¹⁰⁾。また、城兵の多くも命を救われなかった。

しかし、物語はこれで終わらない。おつやの方の忘れ形見六太夫は、信長にしてみれば、裏切者と敵将との間に生まれたが故に追及して誅すべき男子で

8) 資料館の人に依れば、この山城はどこでも100~200mほど掘れば水が湧き出るとのこと。城兵の飲み水のほか、途中にある八幡神社にだけ供される井戸（霧ヶ井）があったりする。実際に長い坂道を登ってみると、そこかしこから水が湧き出て、坂道のわきを水が流れ落ちるのを見ることができる。

9) 当時の武将たちにとって、「如何に情勢を読むか」は生き残りの決め手。長篠城にいた奥平信昌は信玄の死を察知して、武田を見限って徳川側（織田側）に寝返った。その際、奥平から武田側に人質に差し出されていた信昌の妻おふうを武田勝頼が磔刑に処したことが、岩村開城に際しての信長の報復措置の一因であったという説もある（甲陽軍鑑）。おふう（16才）は「来世では畜生に生まれ変わりたい。畜生は己に素直に生きられるが、人は騙しあわなければ生きていけない浅ましいもの」と呟いて刑場に消えたといわれている。

なお、奥平信昌は長篠の合戦以降その武勇と時代を見抜く処世術で栄進し、関ヶ原の戦い以後、家康の長女を娶って美濃加納藩10万石に封じられている。

10) おつやの方は、刑死に際し、あたかもその信長の運命を暗示するかのように「かかる非道の振る舞いは天が許すまじ。追っつけ因果は巡りて苦しき死に遭うべきよ」と叫んだとされる。



六太夫墓（広島県竹原市 丸い積み石（村上元吉墓）の左の四角のもの）



（左）岩村の里の町並
（下左）復元岩村藩主邸（1610年頃に造られ、1881年に焼失した藩主邸のうち、太鼓櫓、表御門、平重門を復元したもの。敷地の一角に岩村歴史資料館がある）
（下右）岩村地区のマンホール



西軍に組し、東軍に走った大名が関ヶ原に出陣した留守を狙って、四国調略に出た。六太夫が村上水軍の能島総師元吉とともに東軍加藤嘉明の伊予松前城を攻めたのは、1600年9月のこと。嘉明は留守で城は簡単に落ちたが、祝勝の宴に気を許したハザマを嘉明の弟加藤内記に衝かれ、六太夫は村上水軍の諸将とともに討ち死にしてしまう。時に、六太夫28歳であった。六太夫は、筆者が先日訪れた竹原市の春の籠の中に、総大将村上元吉とともに眠っていた。「一朝智入信士」というのが墓に記された戒名である¹⁵⁾。

本稿を綴るに当たり、岩村の里にも足を伸ばしてみた。岩村城は織田側が奪取したが、本能寺の変ののち金山城主の森可成の家臣各務兵庫が入り、近世城郭としての改修をしたといわれる。ただ、山上の城の不便さから、麓に藩主邸が作られた。廃藩置県以後に岩村県の県庁としても使われたが、残念ながら1881年の失火で焼失。今はその敷地の一部が岩村歴史資料館になっている麓の藩主邸から山頂の本丸まで実に長い坂道と門が重なる。建物はないが、石

段と石垣が残っている。裏の出丸に至る道も狭く、峻嶒さがうかがえる。岩村城下の一带の街並みは、重要伝統的建物群保存地区に指定されている。この地の攻防記によく名前が出てきて、同じく山城として趣のある苗木城もそう遠くない¹⁶⁾。

地元の「女城主」という酒を舐めながら、往時を偲んでみた。

おつやの方や冒頭に記した女人の人生を顧みると、それらが歴史を優美に飾ったとはなかなか言いづらい。むしろその逆の印象であろう。しかし、男たちの権力闘争や政治の荒波に翻弄されながらも、其々の立場で、ときに意地を貫き、ときに大胆に決断し、しぶとく強かに立ち回ったといえるのではないだろうか。

これを人界「七」苦「八」難とみるか、「七」転び「八」起きとみるかは、後世の者が持つ其々の「心の目盛」による。

15) 出張で訪れた竹原の地で長く精煉業に携わる三井金属鉱業の方に鎮海山の山裾の墓標に案内いただいた。六太夫の墓は「安芸の小京都」と称される美しい街並みを見下ろす切り立った山肌に、村上元吉の鎮に寄り添うように、ひっそりと佇（たたず）んでいた。

手元に「馬場六太夫 口伝が明かす波乱の生涯（木屋青子著 文芸社）」という本がある。馬場家の子孫による魅力的な口伝である。戦いによって多くの命が損なわれることに心を痛めた多感な青年「六太夫」の一面を描くとともに、ここでの本筋に加え「源氏と平氏」の血筋が綾なす独特な家系物語が展開されている。竹原の墓には六太夫であることを窺わせる標記はないが、この本に依れば、まさにその血筋の綾のゆえに重ねて名前を伏せる必要があったとしており、他の戦記にある「曾根兵庫」なる人物が六太夫のことであるとしている。

16) 岩村遠山家が滅亡したのち一門を率いたのは苗木遠山家。もともと苗木城は、景任の弟で病没した遠山直廉（なおかど）のあと、飯羽間城から遠山友勝が移って守備に当たっていた。その子の友忠は、岩村遠山宗家が途絶えたあとと宗家格として「苗木久兵衛」を名乗って信忠の幕僚として活躍。城主はその後入れ替わりがあるが、苗木遠山氏は関ヶ原の合戦では東軍につき、西軍についた田丸氏を降して再度苗木城に入っている。苗木遠山家はそのまま幕末まで苗木1万石の大名として永らえている。なお、遠山の金さん（遠山金四郎景元）は一門の明智遠山家の末裔。「美濃のマチュピチュ城」とも云っていいような苗木城は、木曾川を見下ろす岩山に、巨大な岩盤を天守台にし、狭い敷地に懸造（かけづくり）の技法を駆使した遺構が残る。本年4月「続日本100名城（日本城郭協会）」にも選ばれている。虎繁も一時期この城に在番していたとされる。

近い将来予定されるリニアモーターカーの開通、中津川駅開業に合わせて、新しい観光の目玉として城を再興する計画があり、それも含めたこの地域のてこ入れ策が古田岐阜県知事の陣頭指揮のもと検討されている。



苗木城址



苗木城復元模型図（苗木遠山史料館）